
届いていますか？

雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

届いていますか？

【Nコード】

N2235B

【作者名】

雪

【あらすじ】

どうして……貴方なんかを好きになったんだろう。叶わない恋だとしても、私の想いが貴方に届いてくれば、私はそれだけでもいいと想っていた。たとえば、貴方がホストでも。これは、私の実話です。嘘いつわりなく、書かせていただきます。

☆独り言（前書き）

こんばんは☆☆初めて恋愛小説を書きますO（^O^）Oと言って
も、私の実話ですが（笑）もしよろしければ、感想など評価をして
いただければ嬉しいです♪♪

☆独り言

ねえー今君はなにしてる??

私はあいかわらず、恋ばかりしてるよ。

あんなに……あんなにたくさん傷ついたのに

それでも私は恋愛してる……

どうしても好きな人ができちゃうの

でもね……でも

どうしても君の事が忘れられないの

どうしてかな??

あんなに酷いこと言われたのに

それでも 君の事が好きで

思い出のなかにいる君が どうしてもさよならしてくれないの

私も離したくない

君との思い出忘れたくないの

君が初めてなんだよ

こんな想い……

初カレ

私の名前は 雪。十六歳。

私は十六歳にして、やっとのことで彼氏ができたんだけど、その彼氏が、嫉妬深くて、ナルシストで、なぜか仕事も一緒の所で……。

しかも、同棲までしてるんだけど、ついには限界をこえ、今駅で彼氏に泣き付かれている所でありまして。

出会いは、私が十五歳の時。

友達皆、高校に行くなか、私は中卒でコックとして働いていた。

だけど、なんの出会いもなく、このまま私は彼氏ができずに……。

みたいな事が頭をよぎり、すぐさま出会い系で、出会いを求めてた。

以外にも格好いい人をゲット!!

名前は優君。十九歳。

すごく優しくて、話もあって。

告白された時は、すぐにオーケーをだして付き合いはじめた。

ものの、私がおもっていた彼氏というイメージはいつきに消え去り、わがままの泣き虫の、自己中。

最初は、彼氏なんてこんなものなんだなあ〜っておもってた。

が、限界はそこまできていまして……。

もう、私も付き合って疲れてきたというわけでした。

だって、クリスマスプレゼントが、結婚届けの紙と、結婚指輪！ですよ。

あれが、いちばんきいた。

私まだ、十六なのに……。まだ、やりたいことたくさんあるのに。

そう思い、今こういう展開になっております。

泣きじゃくる彼氏。

それをギャラリーがチラチラとこちらを見て、笑ってる。

私は恥ずかしくなり、やっと我にかえって、優君をなだめる。

「そんなに泣かないでよ」

「だって……だって、なんで急に別れるとかいいだすんだよ。さっきまで、楽しく食事してたじゃないか」

鼻水をながし、優君は震えた声で私に言う。

―それは、最後のばんさんとおもって―

とは、さすがに私は言えなかった。

どう言っているのかわからず、私も黙り込んでしまう。

付き合うのも優君が初めてで、別れるのも優君が初めてで。

皆、別れる時ってどんなふうに別れを告げるんだろう。

バイバイがいちばんいいのかな？

でも……そんな別れかた、なんか嫌だ。

嫌いになったわけでもないのに。

ただ、友達として戻りたくなっただけ……。

私ってわがままなのかな？

なんだか、私も悲しくなってきた。

ツーンと鼻が痛くなり、涙がうかぶ。

私は座り込んで泣いている優君の手を優しく包んだ。

冷たくなった優君の手は真っ赤で、拳を握り締めている。

「こんなに好きなのに……駄目なんか？」

小さく優君が呟く。

「ごめんね……」

喉のあたりが熱くて。

私は謝る言葉しかみつからなかった。

急に優君は握っていた私の手を振りはらい、立ち上がった。

涙で顔が、ぐしゃぐしゃになっている。

「もうお前なんかしるか!! お前だけは……お前だけは」

優君の怒鳴り声に私はびっくりした。

「俺の側から離れないとおもったのに……」

そう言うなり、優君は私を睨みつけて、走って帰ってしまった。

ギャラリ―が、まわりで集まっていたても、今の私には、その声すら耳にはいらなかった。

―お前だけは、俺の側から離れないとおもってたのに―

優君の言葉が、私の頭のなかで、何度も繰り返されて聞こえる。

さっきまで、優君の手を握っていた自分の手を、私はもう片方の手で握った。

まだ……まだ少しか暖かい。

ポロツと、涙がながれてきた。

「今さら……」

笑いながら、私は自分の涙をぬぐう。

だけど、何度ぬぐっても流れてくる涙。

—雪—

もう、優君にこの名前を呼んでくれることはないんだよね。

自分が別れをきりだしたのに……どうして……どうしてこんなにも胸が痛い。

あれから一年がたち、私はもう恋愛なんか……彼氏なんかいらなくて心のなかで誓っていた。

付き合って駄目になるのなら、ずっと友達のままでもいいって。

カラオケ

彼氏と別れて一年がたち、私はろくに出会いもなく、仕事をもくもくとしていた。

「次はサラダだして！！その後スープね」

昼間のレストランは大忙し。

イタリアンレストランの厨房のなかは、戦場とかしていた。

麺を箸でまぜ、私は次々と指示をだしていく。

そんななか、一人のお客さんが厨房を除き混んで来た。

「雪ちゃん」

私は麺を混ぜたまま、振り替える。

そこには、幼馴染みの由香が、友達連れでたっていた。

首筋に流れてくる汗を、私はコック服で拭き取る。

「食べに来てくれたんだ」

私はニツコリ笑って由香に言う。

「うん。今日も忙しそうだね」

「昼間はいつもこんなかんじだよ」

「そっかぁー」

バタバタしている厨房を見ながら、由香は黙り込んでしまった。

後ろにいる友達が、先に会計をすませようと、私に小さくお辞儀し、由香を残して先に行ってしまった。

ウェイトレスが、突っ立っている由香が邪魔なのか、注文を厨房に呼び掛けるたびに、とても困ったようなまなざしをむけていた。

私は黙っている由香に話かける。

「どうしたの？」

―そこにたつてると邪魔―

とはさすがに言えなかった。

やっと由香が口をひらく。

「今度の日曜日暇？」

「日曜日？」

その言葉に聞き返しながら、さっき湯で上がった麺を、ソースがはいった鍋にいれ、私は振る。

「なにかあるの？」
と私。

「気晴らしに遊びにいかないかなって」

ニコニコとして、由香が聞く。

「日曜日じゃなきゃ駄目なの？」

「駄目なの」

即答な答えがかえってきた。

後ろにある皿を2枚取りだし、さっきふっていたスパゲッティを二つにわけながら、私は考える。

「いいよね？」

返事をくれない私に、強引にオーケーをだそうとする由香。

取り分けた二枚の皿を、厨房の前でまっていたウエートレスに渡す。

「休みがとれたらね」

疲れた体を楽にするために、私は溜め息をつく。

「じゃあー、十時に駆ね！」

そう言い残し、由香は満面な笑みで帰って行った。

——うーん、九時ははやいかな……って、えっ！？もう行くの限定！——

日曜日の朝、十時。

私は由香の言われたとおり、休みをとり駅でまっていた。

日曜日の駅には、カップル連れがおおく、私はなんだか虚しい気持ちになってきた。

—なんか……テンションさがるなあ——

ドンツと誰かが私の背中をおした。

「暗い！」

由香だった。

押された背中をさすりながら、私はあーと溜め息をつく。

「溜め息禁止！」

すかさず由香がツツコム。

禁止って言われても。仕事始めてから、溜め息つくのくせになっちゃったんだよね。

心のなかで、そうおもいつつ、私はとりあえず

「はい」

と返事をする。

学生は元気だなあ」と私はしみじみおもう。

コンビニによって、お菓子やらジュースやらを買うなり、近くのカラオケまで歩き。

隣では、由香が学校の愚痴をこぼす。

「大変なんだね」

話をあわせるように、私はこの言葉を繰り返す。

もう、こんな元気、私にはないなあと、由香を見ながらおもった。駅から歩いて十五分の場所のカラオケにつくなり、由香は鞆にはいつていた手鏡を取り出した。

カラオケの前で化粧直しをはじめたのだ。

なんとなく……なんとなくだけど、さっしがつく。

頬をあからめ、由香は深呼吸をし、私の腕をつかみ。

「さっ、行くよ」

たかがカラオケで、そんな意気込んでも。

気合いをいれた由香は、ズンズンとカラオケの中にはいって行き、レジの所まで一直線。

私は由香に腕をひっぱられながら、なすすべなく身を任す。

―引っ張られるって楽―

「いらっしゃいませ。お時間のほうはおきまりですか？」

男の人が、営業スマイルで話かけてくる。

―この人が目当てなのかな？―

ついつい、その男の人をジーと見入ってしまう私。

それにきづいた店員が、私にニツコリ笑いかけてくる。

―い、以外にかっこいい。というよりも、笑顔がかわいい―

財布をだしながら、そんな事をおもっちゃったりもしちゃいます。

由香はというと、レジの男にも目を向けず、奥の方を見ようとつま先立ちで体を揺らしていた。

「一樹は今日お休みですよ」

クスッと笑って店員が由香に言う。

いっきに由香の顔が赤くなり、つま先立ちをやめ、下に目をむけながら、おもむろに財布を捜しはじめる。

―なるほどね。その一樹っていう人がおめあてだったんだ―

カラオケは二時間とり、マイクを二本もらうと、二階へとのぼる。

おめあての人がいないと言われ、由香のテンションはというと……。

うーん、微妙な所でございます。

下がってる？下がってるのか？これは。

歩きながら、由香の顔を除き混む。
ズルッ！

ちゃんと前を見ていなかった私は、階段を一段飛ばし、すべってこけてしまった。

暗かった由香の顔が歪む。

「キャハハハ」

同時に由香の笑い声が階段に響く。

―笑ってないで、助けてよ―

携帯（前書き）

登場人物の名前は、すべてかえてあります m
（
）
m

携帯

二時間、ぞんぶんに私達はカラオケを楽しんだ。

まあ、ほとんど由香の一樹君ラブ話をほとんど聞かされ、時間はあつというまに過ぎたって言ったほうがいいかもしれない。

満足げに、由香は階段をおりる。

「楽しかったね」

「そうだね」

まいど、お馴染みの言葉をかわしながらレジにつくと、由香はマイクがはいったカゴを店員に渡す。

「また来てくださいね」

さわやかな笑顔の店員に、由香は一瞬くぎづけになっていた。

と思われる。

—おい、あんたには一樹君でしょ—

あえて、私は口にださない。

営業スマイルは私にもむけられた。

—コックでも、営業スマイルぐらいはできるんだからね—

おもいっきり歯を見せるかのように唇を上押し上げ、まけじと笑

顔を返す。

変な顔になってしまったのか、店員が違う笑み……ではない。

客の笑顔で爆笑している。

私はなんだか恥ずかしくなり、はやくその場から逃げたくなった。

―営業スマイル……失敗に終わってしまった―

「なんか飲むうー？」

カラオケから、少し歩いた所で自動販売機を見つけるなり、由香が足を止めた。

「いいねえ」

ちょうど喉がかわいていたため、私は財布をだそうと鞆をあさぐる。

「えっ!？」

ついつい大声をだしてしまった。

自動販売機にお金をいれようとしていた由香の手が止まった。

「な、どうしたの？」

私は焦って鞆の中をもう一度あさる。

―ない。ない……まじですか―

「携帯がみあたらない」

「うっそ！カラオケにおいてきたんじゃない？」

まさしく由香の言うとおり。

携帯をテーブルにおいたまま、そのまま帰ってきてしまった。

でも、ここからカラオケはすぐ近くなので、それほど焦る事はなかった。

「まってて由香。私とりにいつてくるから」

「いつてらっしゃあゝい」

地面に座り込み、由香は私に手を振った。

―ああ。ついてきてくれないのね―

カラオケにむかってはしり、入口にはいろいろとしたときだ。

さっきレジにいた店員さんが、飛び出してきた。

急いで私は急ブレーキを体全体でかける。

目に入っただのは店員さんの右手。

「忘れ物」

一安心したかのように、店員さんはフーと一声ついた。

「すいません。ありがとうございます」

お辞儀をしつつ、私は店員が持っている携帯に手をのぼす。

すると、店員さんは携帯をかえすよりも先に、ポッケのなかから名刺をだすなり私に差し出す。

「なんですか？」

ポカーンと、私は差し出された名刺と店員を交互に見る。

照れながら、店員さんはニツコリ笑う。

―おっ。営業スマイルではない―

なんとなく、私はそんなかんじがした。

「もしよかったら、友達にならないかな？」

手慣れたようなかんじで、店員は言う。

―ナンパだ―

速攻私は、自分の携帯だけとった。

店員の手には、名刺だけが残っている。

「失礼します。携帯、ありがとうございました」

冷たく私は店員にそう言い残し帰りかけた。

が、いつのまにか由香が私の後ろにへばりついていて、店員さんがもっている名刺を取り上げる。

そりゃ、店員もびっくりですはな。

さっきの私みたいに店員もポカーンしとります。

「メールさせときまあゝす」

あまつたるい声で由香は店員に言う、私の背中を押して、さっさとその場を去った。

上機嫌で由香は私に取り上げた名刺を渡そうとする。

「無理！」

「駄目！」

「なんで？」

テンポのよい会話は、ここで途絶える。

モジモジとしている由香。

―なるほどねえー。まったくもおー

私は由香が持っている名刺をもらう。

いきなり由香の目が輝き出す。

「合コン、セッティングしてほしいんでしょう？」

肩をすくめ、私は嫌そうに名刺に書いてあるメアドを携帯に打ち込む。

「さっすが！わかってんじゃない」

「由香が考えてる事は全部お見通しです」

メアドをうち終えると、登録ボタンをおした。

「さっきの店員さん。名前は誠。二十五歳。皆には【まーくん】って呼ばれてるらしいよ」

ニヤアーと由香の顔が意地悪げに笑う。

「あっそ」

興味なさげに私は返事をかえす。

足早に歩く私のあとを、由香がついてくる。

「顔もそこそこだし、いいとおもわない？」

「却下」

「もおー」

由香の足が止まる。

しょうがなく私も足を止め、後ろを振り向く。

ふくれっつらで由香が私を睨む。

「まだ忘れれないの？ ゆうちゃんのこと」

―おっと、過去をひきずりだしてきますか―

「そんなことないよ。ただ今は恋愛したくない気分？」

いまいち自分でもよくわからず、自分で自分に聞く。

―どうなの自分？―

あっ、今痛い子みたいだ。

「行くよ由香。おいてくぞおー」

クルッと向きを変え、私はめんどくさげに言葉を長くのばす。

由香が走ってくる。

「昔は恋愛ばっかしてたのに」

隣につくなり、ボソッと由香が私に一言なげかける。

―話題はかわらないのかな―

「昔は昔。それに昔の恋愛なんて、一度も成功したことないし」

「いろんな人と付き合えばいいのに」

もったいなさそうに、由香は自分の手に息をふきかけ、私をチラ見する。

「由香は彼氏づくりすぎなの。私なんてまだ一人なんだから」

「まあー、最低記録一週間の人もいたけどね。でも、すきで別れてるんじゃないよ」

「わかってる。今は…なんていうんだろう。本気の恋ってどんなかんじだったかってかんじの壁にはさまれてるかんじなの」

それにかんしては、本当に困ってる所だった。

私、どうやって人を本気で好きになってたんだっけ。

「ゆうちゃんと付き合い始めてから、なんかおかしくなったよね」

鞆のなかから飴玉を出し、口のなかにほうり込んで由香が言った。

「そうだっけ」

かってに由香の鞆に手を突っ込んで、私は飴玉を盗む。

「彼氏恐怖症?？」

「どけなんしょ。わかりまへん」

口のなかに飴玉をいれ、下でコロコロしながら遊ぶ私。

ひんやりと冷たい風が、頬にあたる。

ヘックチッ！

二人してくしゃみ連発（三回）

「とりあえず」

垂れそうになる鼻水を私はすすする。

「合コンセッティングやね」

「うし、気合いいれていかなねえ」

両手をふりわして由香は嬉しそうにはしゃぐ。

本気の恋愛……。もう、私には無理なんじゃないのかな……。。

合コン

家に帰ると、私はそっこうコタツのなかに入り込む。

「あったかあゝい」

体全体をコタツの中に押し込み、おいてあるミカンをとりと皮をむく。

―冬はコタツにかぎるねえ―

ここで口にだすと独り言になってしまうので、ここは心のなかで、心のなかで。

あまりの暖かさに目が閉じようとしてたとき、鞆のなかにいれていた携帯が鳴った。

眠りをさまたげる、メロディー。

すぐに由香だと確信した。

コタツの掛け布団を引っ張り、少し遠くにある鞆に手を伸ばす。

―コタツから、出たくないのおー―

混信の力をふりしぼり、短い手をなんとかのぼし、鞆ゲット。

鞆から携帯を取り出すと、メール受信を押す。

「今すぐ、まーくんにメールせよ〇（＾〇＾）〇」

顔付きでございますよ

私は

「了解」

と返信をおくり、登録した【まーくん】にさっそくメールを送ることに。

「どうも。さきほどはありがとうございました……もしよろしければ……」

口にだしながら、私は携帯に文字を打ち込んでいく。
ある程度、メールを打ち、送信ボタンをポチッ。

いろんな人とメールしてそうだから、かえってくるの遅いんだろうなあ。

そうおもっていたやさき、着メロが鳴り響く。

由香の着メロではない。

寝転びながら、私はメールを見る。

「いいねえ〜。もちろん賛成☆人数はどうする？日取りは、できれば日曜日がいいんだけどどうかな？」

と打ってある。

「皆日曜日好きだねえ〜」

まーくんからメールがかえってきたことを由香にしらせ（メールで）その後、まーくんにもメールをかえした。

合コンは、やはり日曜日におこなわれた。

それも、夜の九時からという、なんとも微妙な時間から。

私は仕事を昼間ででて、事務所で時間をつぶしてから、待ち合わせの駅でまっていた。

どうやら、私が一番らしい。

首にまいたマフラーを口までもっていき、体を暖めようと足踏みする。

すると、違う通路から由香と、由香の友達二人が歩いてきた。

三人とも、気合いじゅうぶんの、おしゃれっぷり。

それにくらべて私は……。

あえて、そこは自分でも考えないように。

手を振りながら、由香が小走りでこちらにむかってくる。

その他の友達のはんびり、タバコをくわえながら歩いていた。

真っ赤になった鼻を両手でおさえ、私は暖める。

こちらにくるなり、由香はまず下から上まで私の事を何回か見返す。

「なんか言われるんだろうなあー」

「なんで、おしゃれしてこなかったの？」

「ほーら言われたー」

「仕事で朝はやいから、服きめる時間がなかったの」
ムツとして私は由香に言う。

冬だというのに、三人はミニスカのブーツに薄着。

寒いのか三人の体は震えている。

私は鞆の中にいれていた、ミニホッカイロを三つ出すと、由香に渡した。

「友達にもあげなよ」

「わぁーありがとう」

そうとうホッカイロが嬉しかったのか、由香はホッカイロの袋をやり、シャカシャカと振り出す。

「ああすると、すぐに暖まるっておもっちゃうんだけど、本当は違うんだよねー」

などとおもって由香の行動を見たりしています。

あとの二つを、やっとここまで来た二人にホッカイロをあげる。

「雪があげるって」

顎で私をさしながら、由香が言う。

「キャアー！」

二人が悲鳴のような声をあげ、ホッカイロを嬉しそうにうけとる。

―若い！―

はしゃいでいる姿を見て、私はいちばんにおもった。

「ありがとう。自己紹介まだだったよね。私は亜美」

短い茶髪の女の子が、ニツコリと私に笑いかける。

もう一人も、慌てて私に自己紹介する。

「あっ、私和泉。よろしくう」

こちらも、茶髪だが肩までつく髪をウェーブでまとい、ギャルとはいいがたい、お嬢様雰囲気をかもしだしていた。

なごみながら四人で話していると、誰かが私の頭をポンツとたたく。

三人が急に話をやめ、おしとやかにしだした。

「おくれてごめんね」

私の頭に手をのせたまま、まーくんが私達に挨拶する。

その後ろには、レベルの高い男の人達。

やっとメンバーがそろい、とりあえず皆で居酒屋に行く事にきまつた。

のはいいが、もう組み合わせが決まっちゃってしまっていた。

駅から居酒屋まですぐの道程。

由香は一樹君とおもわれる男の人と楽しく話ながら歩いている。

亜美も和泉も、ちゃっかり、好みそうな人の隣をゲットし、楽しそうにしゃべっていた。

私はどうと……。

「雪ちゃんってお酒飲めるの？俺酒強いほうでさあ」

一人で、話しているまーくんの隣にいるわけです。

私はどうしていいのかわからず、笑ってごまかすだけ。

それだけの反応でも、まーくんは自分で盛り上がっている。

―タイプじゃないんだよねあー

顔はよいとしても、こんなに自分から話す人は、はっきり言って私にがてなのです。

口にもらさず、私は気持ちのなかで溜め息をつく。

はしゃいでいる三人に比べ、私は落ち着きすぎなのかなあ。

というか、人生に冷めているのかも。

―それって女としてどうなの！まだ十七なのに！！―

「俺てきには駄目だとおもうんだよね」

「えっ!？」

驚いて私はまーくんへと視線をかえる。

「最近の売り上げ。もう少しのばしたいんだけど、皆は満足してるみたいで」

腕をくみ、ウーとまーくんは唸る。

―びっくりしたあー。自分がおもってることに、つつこまれたかと―

真剣に仕事の話をするまーくん。

なんか：そこまで軽そうな人じゃないのかな。

歩くペースを私にあわせてくれるまーくんに、なんかそうおもってしまった。

しだいに、私もまーくんの会話に入り込んでいく。

憂鬱だった気分が、消えていくのがわかる。

合コン（後書き）

この話、どうやら長くなりそうです m () m

酒乱

―頭痛い―

ふと目を開けると、四人分の足が見えた。

―えーと……ここはどこだっけ？―
回らない頭で記憶をたどる。

―駅で待ち合わせて。皆で居酒屋に行くことになって―

考えていると、何かが私の額に触れた。

ヒンヤリとした冷たい物。

「目が覚めた？」

まーくんの声だ。

しかも、私の頭の上から聞こえる。

顔だけ動かし、私は上を見上げた。

すぐ近くに、まーくんの顔が現れた。

―この体勢は―

寝転がっていた場所を、私は確認する。

まさしく、まーくんの膝。

恥ずかしくなり、私は勢いよく体を起こそうとした。
ゴンッ！

テーブルが右頭部にぶつかり、私の体はまーくんの膝へと戻される。

ブツとまーくんが吹き出す。

「だ、大丈夫？」

必死に笑いをこらえながら、私の頭をなでる。

ーい…たくはない。けど、この感じはー

両手で口を押さえる。

喉になにかがわき出て来るかんじ。

「吐きそう」

騒いでいた六人の話し声がやみ、テーブルの下を除き混む。

「大丈夫？雪」

顔を真っ赤にした由香が、私に問い掛ける。

しかし、限界もそこまでできていた。

気分が悪い私は、反応すらできない。

ほてった体に、冷や汗がうかびあがる。

すると、急にまーくんが私の体を抱き起こした。

「外行ってくる」

私の手を握り、まーくんは六人につげる。

お酒で酔っ払ってしまったている六人は、なぜか爆笑しながら私達に手を振った。

足に感覚がなく、力がいらない。
私はまーくんに体をゆだねながら、外へとでた。

寒い風が、すごく心地いい。

「うー」

おやじのような声で、私は風にひたる。

まーくんが私を店の前のベンチに座らせると、また店の中へと戻っていった。

「ラララァ」

頭がおかしくなった私は、なんだか吐くことは忘れ上機嫌。

「やっぱ酒はいいやねえ」

「これ飲んで」

いつのまにか戻ってきたまーくんが、私に水がはいったコップを渡す。

「あんがとさん」

可愛らしさのひとかけらもない私の礼。

酔ってたからねえ。

しかたがなかったのですよ。

もらった水を、私は一気に飲んだ。

まーくんも、かなり酔ってしまっているのか顔が真っ赤だ。

私達は、白い息をはきながら、夜空を見上げた。

「星が綺麗だねえ」

うっとりとしながら、私は星を見ていた。

などと私は言っていたが、この時星などまったくでておらず、曇りで雨も、ちらほら降り出していた。

たぶん、私の頭のなかで星が輝いていたのでしよう。

まーくんは、無言のまま星？ではないが、空を見ていた。

なんだか、私は冬の空を見て、初カレの【ゆうちゃん】の事を思い出してしまっていた。

―車がない私達は、よく2ケツで雪の中はしったなあ。―

―野良犬にはおいかけられるし、警察には2ケツで注意されるし―

—お金もなかったから、デートって言っても、家でまったりだったもんなあ——

お酒のせいかな…。

目の前の風景が歪んできた。

瞬間、私の頬に冷たいものが流れでる。とめどなく流れる涙に、私は驚いた。

と言っても、一いちばん驚いていたのは、まーくんのほうだったが。

頭のなかで、思い出したくないのに、【ゆうちゃん】との楽しい思い出ばかりが映像となって浮かんでくる。

泣いている私の頭を、まーくんがなでる。

よけいに涙が流れる。

—一年も前のことなのに—

「どうした？」

さすが二十五歳。

すぐに落ち着きはらったような、優しい言葉を私にかける。

「私…私」

どう話していいのかわからない。

―だって一年の彼氏の事で泣いてるなんて、どんだけ引きずってんのって絶対おもわれる―

喉につまる言葉を、私ははこうとはしない。

胸が苦しくて、痛くて…。

ゆうちゃんは、どんな気持ちだったんだろう。

変わらない日々を過ごしてたときに、急に私が別れ話をきりだして。

―恨まれてるよね―

「言ってみな。一人で抱え込んでるから、爆発しちゃうんだよ」

暖かいまーくんの息が、私の頬にかかる。

「大丈夫。俺も酒はいつてっから、あんま覚えてねーし。なっ、だからなんでも話してみ。楽になるから」

その言葉に、私はやっと閉じていた口をひらく。

ゆうちゃんと付き合ってたこと。

縛られる毎日が苦痛でしかかんじなかったこと。

そして、いい別れ方をしなかったこと。

まーくんは、何も言わず、ただ静かに私の話を聞いててくれた…。

私は、おもっている事をすべて話した。

お酒のせいで、どこかしら変な話もあったが、あえてまーくんはつつこまない。

「辛かったな」

話終わったあと、そうまーくんは私に言うのと抱き締めてくれた。

「雪は頑張った。彼氏にたくさん幸せあげたんだから、自分が全部悪いとかおもうな」

私はまーくんの服を握る。

ますます、まーくんは私を強く抱き締める。

―あったかいな―

「ありがとう」

小さい声で、私はまーくんと言った。

流れていた涙はいつのまにか乾き、私の心も軽くなった。

と、まーくんが私の肩を持ち上げた。

体がまーくんから離れる。

まーくんの顔がやたら近くて、恥ずかしさのあまり、私は体が固まってしまう。

そして、まーくんは戸惑う私に優しく唇を重ねてくる。

冷たいまーくんの唇。

――久しぶりにキスしたなあ――

照れる私に、まーくんがプツと笑う。

「酒飲むと酒乱になるんだな」

好きだなあゝ

合コンが終わってからというものの、私とまーくんは、ちよくちよくメールするようになった。

仕事の愚痴など。

あと、だいぶん前から私を知ってたことなど。

―そう言えば、カラオケっていったら、あの店しかいなかったもんなあゝ。しかも、まーくんがいつも会計してたっけ―

メールを打ちながら、私はなんだか幸せでいっぱいだった。

―久しぶりに恋愛してるうゝってかんじ。―

でも、付き合っているわけじゃないんだよね。

文字を打ち込んでいる手が止まる。

「なんだろう。この微妙な関係は」

まーくんのメールにハートマークをつけている自分につっこむ。

あれから、私はまーくんとたくさん遊んだ。

遊ぶたびに、大人だなあと私は、しぶしぶおもった。

―二十五歳ですからねえ。大人なのは、あたりまえか―

一つ一つの言葉とか、なんか…なんていうんだろう。

もう！全部好きなんです！！

って誰に言ってるんでしょう自分。

「じゃー、告白すればいいのに」

その誰かが私につっこむ。

そういえば、由香とコタツにはいって、まったりしてたんだっけ。

私はコタツのシーツをひっぱる。

同時に由香も引っ張りかえす。

ムツと私と由香は睨みあう。

「付き合いたいとかそんなんじゃないんだって……たぶん」

負けじと、私はシーツをひっぱる。

「たぶんでしょ。だいたい好きなら付き合うのがあたりまえでしょ」

由香も、シーツを引っ張る。

「付き合ったら……辛いだけじゃん。なら、友達の間までいいの」

引っ張る手に力がある。

「彼女ができて？」

「それは…」

手の力が緩む。

勝ち誇ったような顔で由香は私を見ると、自分の陣地へとシーツを引っ張る。

「付き合ってみないとわかんないよ」

「でも…」

嘘だよな？

ポケート、私はハンバーガーにかぶりついている、まーくんに見入っている。

好きと自覚してからというもの、私は、この気持ちをどうしたらいいのかわからず、ただ普段どおり…。

には、とうていできず。

見入っている私に、まーくんがニツコリ笑いかける。
私は無言で、目線をそらす。

―普通どおりに話せないよお。―

「今日元気ないけど、風邪とかなん？」

心配そうに、私の額に触れようとするまーくんの手。
暖かいまーくんの体温が私の頭をかけめぐる。

「ぜ、全然。絶好調」

―なにが！―

自分の言った言葉に、私はすかさずつつこむ。

テーブルにおいていた車のキーをとり、まーくんが立ち上がった。

「帰ろっか。家までおくるよ」

—えっ！？まだ一緒にいたい—

何て事は、私には言えない。

だって、彼女でもなんでもないのに、こんな“わがまま”言えるはずがない。

—嫌われたらやだもん—

素直にまーくんの指示に従う私。

車に乗り込んでも、音楽だけが耳に流れ込んでいる。

—どうやって、話してたっけ。好きって確信がないとき、どうやって、あんなに楽しく話してたんだっけ—

「ついたよ」

急なまーくんの声に、私の体がビクッと動く。

もう家の前についてしまった。

「ありがとう」

精一杯の私の言葉。

鞆をもち、私はドアを開けようとした。

瞬間、まーくんが私の手首を引っ張り自分の唇へともっていく。

私は驚いて目を開けたまま硬直。

「クリスマス。一緒に過ごしたいね」

唇を離し、私を優しく抱き締めるまーくん。

嬉しくて、私はまーくんの胸のなかで小さくうなずく。

—すごく…幸せ—

私は、クリスマスにむけて、手編みのマフラーを編んでいた。

—喜んでくれるといいな—

笑いながら、私が編み物をしていると、横から、誰かの顔がでてきた。

「今時マフラーかよ」

そう、私の兄貴だった。

「別にいいでしょ!」

マフラーをコタツに隠して、私は兄貴に言う。

カレーライスがはいった皿をテーブルにおき、兄貴はテレビをつける。

「今時ねえ」

もう一度同じ言葉を私に告げる。

―このヤロー。喧嘩うっとなのか―

兄弟同士の喧嘩のゴングが鳴ろうとしたとき、私の携帯が鳴る。

編みかけのマフラーをコタツの中に隠し、私は携帯にでる。

「もっしい」

由香からだ。

「どうしたん？こんな時間に」

「あのさあー。すごい言いにくいんだけど……」

落ち着きのない由香の声。

やたらと後ろのほうも騒がしい。

「今どこにいるの？」
と私。

「一樹君と一緒にゲーセンにおるんよ」

『はやくいっちまえよ』

遠くの方から、一樹君らしき声が聞こえた。

受話器を手で押さえたのか、ゴソゴソと音がこすれる。

「今言おうとしてるんだって」

小声で私に聞こえないように、由香が一樹君にしゃべっている。

—もろ聞こえてますけどね—

ハハハッと私は笑う。

『傷つかないうちに言っちゃれよ。……………してるって』

一樹君の声だ。

うまく、最後まで聞き取れない。

「どうしたの？」

なんか、ただごとではなさそう。

私はそう感じた。

やっと受話器から手をとったのか、由香の息遣いが耳にはいる。

「落ち着いて聞いてね」
と由香。

「う、うん」

「あのね…」

間があく。

緊張する私。

「まーくんの事なんだけど。……してたって」

大事なぶぶんで、由香の声が小さくなる。

「な、なに？」

私は聞き返す。

「だからね、実はまーくん、結婚してるの」

「はっ？」

裏返った声はもちろん私。

そんなことも気にせず、由香は話をつづける。

「息子が一人いるらしいの。さっき一樹君に聞いて…」

「なにを言ってるの？」

由香が私に何か言ってる。

聞こえない…。

頭の中が真っ白になる。

「なに…それ」

目の前が、涙でうもれる。

「最低だよね！雪、今からまーくん呼び出してなんか言ってやれ」

怒った声で由香が私に言う。

涙が頬につたり、もう顔はぐしゃぐしゃに歪む私。

カレーライスを食べていた兄貴の手が止まる。

「なに泣いてんだよ！」

焦る兄貴。

私は片方の手で、自分の前髪をつかむ。

胸が痛い。

苦しい…息ができないよ。

「ほ、本当かどうか…まーくんに確かめる」

信じられない気持ちのほうが大きかった。

私は、何か叫んでいる由香の言葉を見殺し、電話を切る。

兄貴が私の頭をなでてくれていた。

——まーくんと会うなら、涙はとめておかなくっちゃ——

そうはおもうものの、涙が止まるまで時間はかなりかかった。

どうか……真実ではありませんように。

ずっと私は、まーくんに会うまで心のなかで祈った。

神様など信じていない私だったけど、このときばかりは、神様を信じたい。

「ごめん。本当なんだ」

涙が止まった私は、家の近くの公園でまーくんと話していた。

星空が、私達の影を照らしている。

「嘘だよね？」

信じたくもない言葉が、まーくんの口からもれる。

まーくんは、じっと私の目を見る。

そらすことのない瞳が、私には辛かった。

鼻の奥から、しみでる痛み。

―泣いたら駄目―

私は自分の手を膝の上で握った。

「本当のことなんだ。子供もいるし、結婚して五年にもなる」

「じゃー、どうして家庭があるのに、私にキスなんかしたの？」

―もう限界…―

「最初は遊びのつもりだった。でも、だんだん好きになっていく自分がいって。雪を…傷つけるつもりはなかった」

「私は、どうしたらいいの？」

この言葉を出した瞬間、私は胸につかえてたものが、一気にわき上がってきた。

あんなにも家で泣いたのに、涙は止まる事を知らず、私の視界をさえぎる。

「この気持ち、どうしたらいいのよ」

「ごめん」

「謝るなら、はじめから私にかまわないでよ…」

消え入るような私の声に、抱き寄せようとするまーくん。

すかさず私は、まーくんの手を振り払う。

「まーくんなんて最低！もう…もうこれっきり会わない」

「さてよ。なんで終わりにしなきゃいけないんだよ！」

「結婚してる人に、想いをよせてもしかたないじゃん！」

「結婚はしてるけど、別の方法だってあるだろ」

「不倫…とか？」

もちろん、この質問にまーくんは無言だった。

私から目を逸らし、うつむいたまま。

「なんで、こんな人好きになったんだろう…」

「なんで、こんな状況になっても、この人の事嫌いになれないんだろう…」

「もう…辛い」

呼吸をととのえ、私は涙をぬぐう。

「ごめんな」

「それしか言えないの？」

「ごめん」

同じ言葉ばかりを繰り返すまーくんに、私はイラッとした。

うつむいている、まーくんの“むねぐら”を掴み、私はおもいつきりビンタをくらわした。

「さようなら」

そう言い残し、私はまーくんを一人公園に残したまま、走って帰った。

全速力で、私は後ろを振り向かず走る。

「うつ……うつ」

ようやく家の階段にたどりつき、私は崩れるように座り込んだ。

「わああーん」

どんなに泣き叫んでも、痛む心は静まってはくれない。

好きで、好きでしかたがなくて。

どうすることもできない、この気持ち。

嘘って言ってほしかった…。

—もう限界…—

「最初は遊びのつもりだった。。。嘘って言ってほしかった…。

嘘だよね？（後書き）

修正がちゃんとなっていないところがあるとおもいます。時間があるとき、また見直して治したいとおもいます

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2235b/>

届いていますか？

2010年10月10日00時40分発行